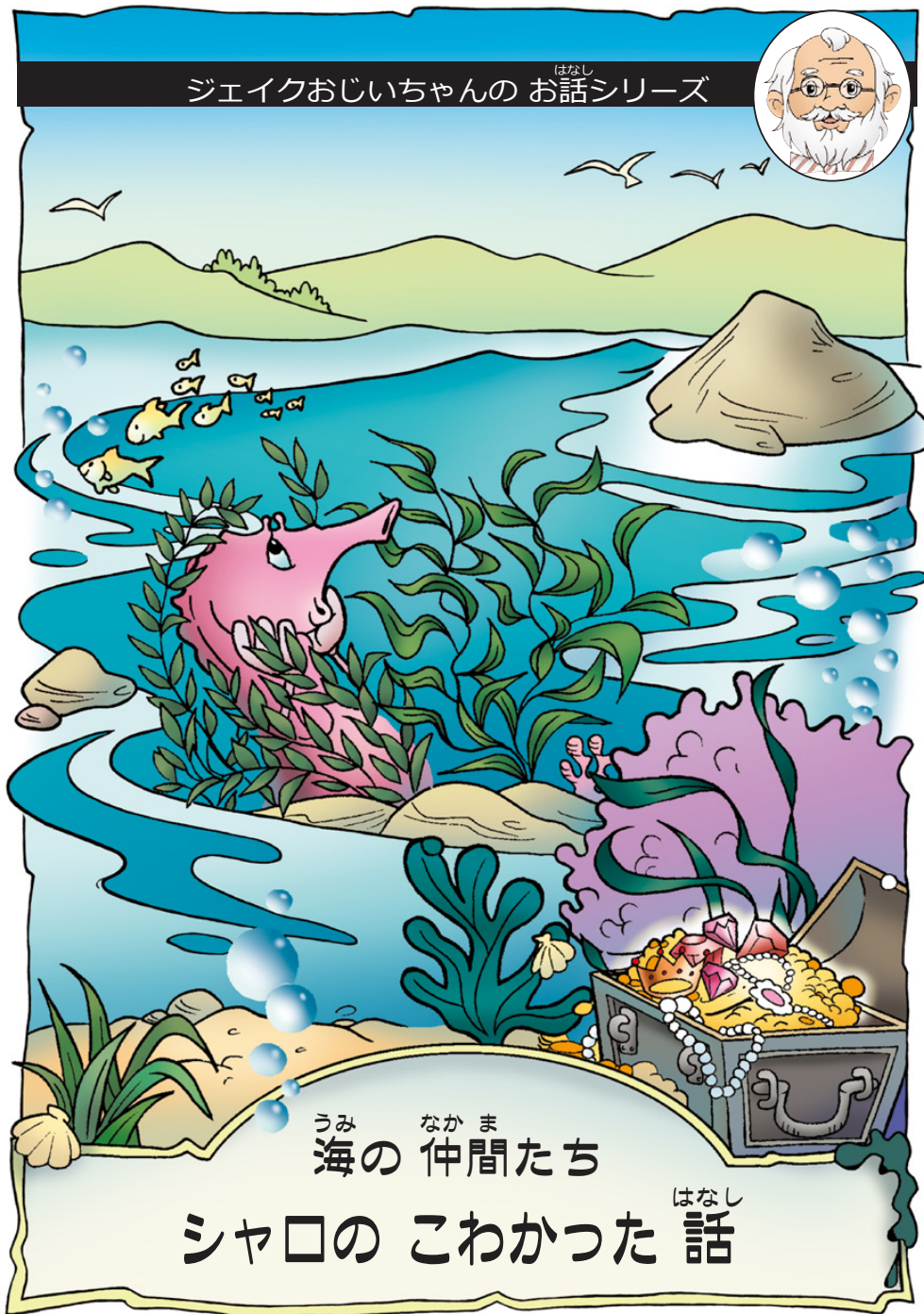




「おやまあ、トリスタン。部屋が散らかしっ放しじゃないか。
おもちゃやレゴを出す前に本を片付けるようになって、言っ
ただろう。」

「レゴで遊びたかったんだもの。本を読むの、あきちゃったんだ。」
とトリスタン。

「本にあきたのは分かるが、言いつけは守らないとな。」

「だって、すぐにレゴで遊びたかったの。本は後で片付けようと
思ったんだ。」

「言いつけを守るとは、すぐにやるということだよ。後で、とか、
その気分になったら、というわけじゃない。そうだろう？」と
ジェイクおじいちゃん。

「うん。」とトリスタン。

「^い言いつけを^{まも}守るのが どうして
^{たいせつ}大切なのか、知っているかい？」

トリスタンは、ちょっと
^{かんが}考えていました。「おじいちゃんに
^{よろこ}喜んで もらうため？」

ジェイクおじいちゃんは
クスッと ^{わら} 笑いました。

「それも そうだが、
もっと ^{たいせつ} 大切なのは、何か
^{わる}悪い ことが ^お起こらないように、
^{かならず}必ず ^い言いつけを ^{まも}守らないと
いけない こともあるからだよ。
たとえば、^{じてんしゃ} 自転車に ^の乗る ときは、
ヘルメットを かぶる ことに
なっているだろう？ だけど、
ある^{とき}時、かぶりたく ないとか、
^{べつ}別に かぶらなくても いいやって
^{おも}思ったら、かぶらないのかい？
それで、^{じこ}事故が ^お起きたら
どう なるんだい？」



^{あたま}頭に ^{おお}大ケガを しちゃうかもね。」
と、トリスタン。

「そういう ことだ！ それで、
シャロの ^{はなし} お話を ^{おも}思い出したよ。
^い言いつけを ^{まも}守ることが
^{たいせつ}大切だって ^{まな}学んだ ときの
^{はなし} お話だ。」

「おじいちゃん、その ^{はなし} お話を
してくれる？」

「じゃあ、まず ^へ 部屋を ^{かたづ}片付けるのは
どうだい？ そしたら、シャロの
^{はなし} お話を してあげよう。いいね？」
と、ジェイクおじいちゃん。

「^わ分かった！ すぐに、
^{かたづ}片付けるね。」トリスタンは
わくわくしながら ^{こた} 答えました。



^{うみ}海は、^よ良い ^{てんき}お天気でした。^{にっこう}日光が
^さ差しこんで きて、^{すいめん}水面下は ^{あか}明るく ^{あた}温かです。
シャロは ^{いわ}岩に ^いすわって ^ああくびを ^なしながら、
^{こいし}小石を 投げていました。



「つまらないなあ。友だちは いそがしくて、今日は だれも
遊び相手が いないもの。何か、楽しい ことが ないかなあ。」



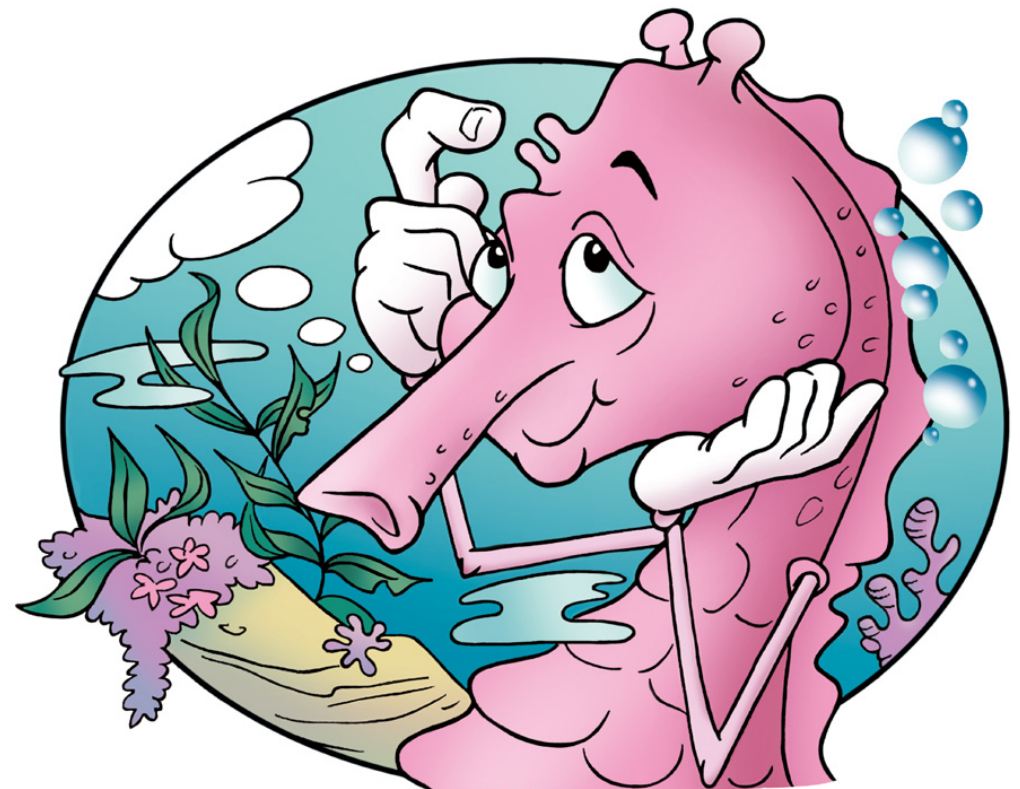
シャロは ちょっと 考えると、こうふんした 笑顔で はねました。
「シャドーポイントを見て来よう！」

シャドーポイントは、シャッダ王国の 最果てに あります。
人魚や 魚たちは、シャドーポイントには 近付きません。

シャロは 両親に、そこには 行かないようにと 言われています。
そこが、危険な 場所だからです。

（きっと、そんなに 危険な 場所じゃ ないよ。ぼくを こわがらせ
ようとしているだけさ。きっと、楽しいぞ！ そこが どんな
場所なのか、ちょっと 見て来よう。友だちに その話を するんだ。
きっと、感心するぞ！）と、シャロは 思いました。

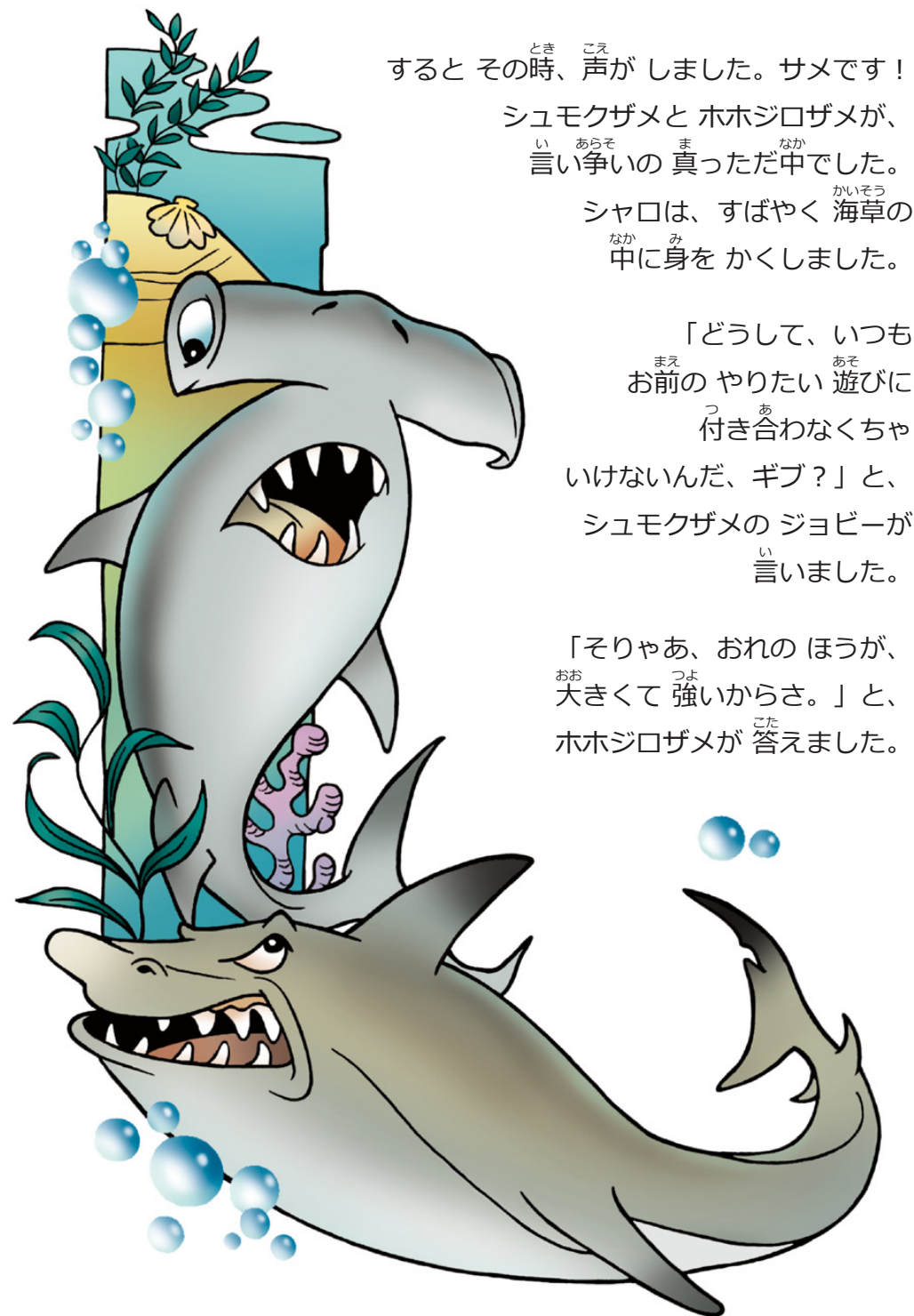
シャロは、周りに だれか いないか、見回して みました。
それから、シャドーポイントに 向かいました。だれにも 見つかりたく
なかったのです。





シャロが シャドーポイントに ^{ちかつ} 近付くと、
^{たいよう} 太陽は もう かがやいて いないようでした。
^{みず} 水も にごってて、^{つめ} 冷たいのです。
 そこらじゅう、長い ^{なが} 海草で いっぱいでした。
 シャドーポイントの ^む すぐ 向こう側には、
^{ふね} 船が しずんでいます。

「すごい！ クリップとゴビーも、
 ここを ^み 見たがるだろうなあ。いい ^{みやげばなし} 土産話に
 なるぞ。」と、シャロは ささやきました。



すると その時、^{とき} ^{こえ} 声が しました。サメです！

シュモクザメと ホホジロザメが、
^い ^{あらし} ^ま ^{なか} 言い争いの 真っただ中でした。

シャロは、すばやく ^{かいそう} 海草の
^{なか} ^み 中に身を かくしました。

「どうして、いつも
^{まえ} お前の やりたい ^{あそ} 遊びに
^つ ^あ 付き合わなくちゃ
 いけないんだ、ギブ？」と、
 シュモクザメの ジョビーが
^い 言いました。

「そりゃあ、おれの ^{おお} ほうが、
^{つよ} 大きくて 強いからさ。」と、
 ホホジロザメが ^{こた} 答えました。

「そんなの、ずるいぞ！ お前は ^{まえ}大きくて ^{おお}強いかもしれないが、おれの ^{つよ}ほうが、ずっと ^{はや}速く ^{およ}泳げるんだぞ。」と、ジョビー。

「そんな こと ないさ！」

「そうともさ！ ^{なん}何なら、
おれを ^はつかまえて ^みろよ。」

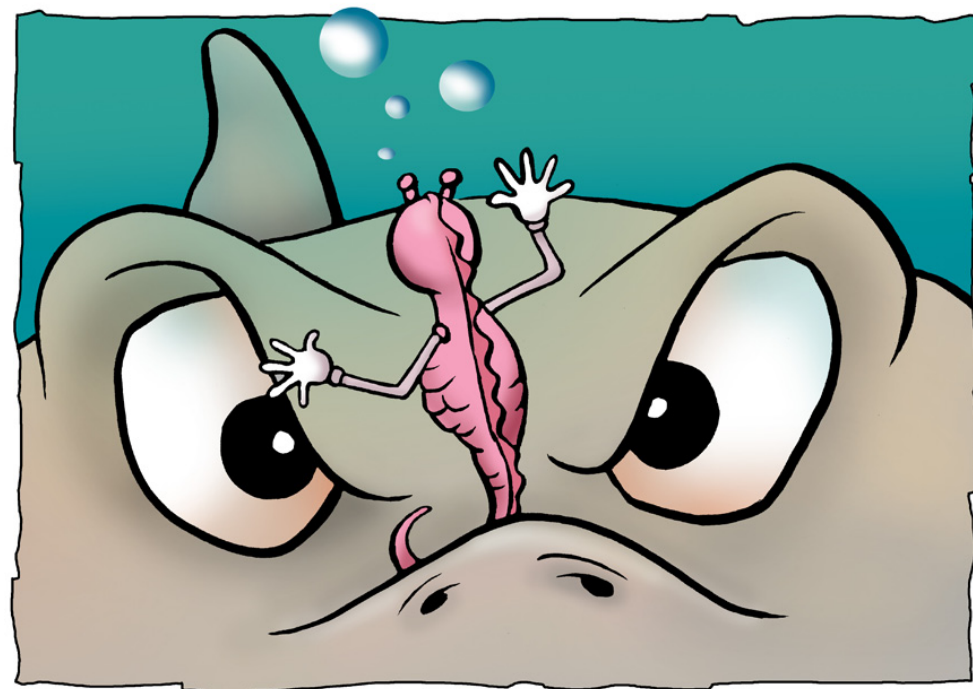
「ようし、つかまえるぞ！」
おこった ^いギブが 言いました。

ジョビーが ^{およ}すばやく ^さ泳ぎ去ると、
ギブが ^{あと}後を ^お追いかけて ^{はじ}始めました。

とつぜん、シャロは、ジョビーが
自分の ^{じぶん}かくれている ^{かいそう}海草の ^{ほう}ほうに
向かって ^む来るのに ^{きづ}気付きました。



シャロは ^{ぜんそくりよく}全速力で ^{かいそう}海草を ^{のぼ}よじ登りましたが、ジョビーが ^{かいそう}海草の
^{なか}中に ^{つつこむ}つつこむと、シャロは ^{よろけて}よろけて、ギブの ^{はなさき}鼻先に ^{ころ}転がり落ちて
しまいました。



「^{いったい}一体、これは ^{なんだ}なんだ？ タツノオトシゴの ^{おチビさん}おチビさんじゃ
ねえか！ ^{いえ}家から ^{とお}遠くへ ^{はなれ}はなれ過ぎたんじゃ ^{ないかい}ないかい？」

「シャドーポイントには ^い行くなって、^{おや}親に ^い言われなかったのかい？」
と、ジョビーも ^い言いました。

ジョビーと ^{おおわら}ギブは、大笑いしました。

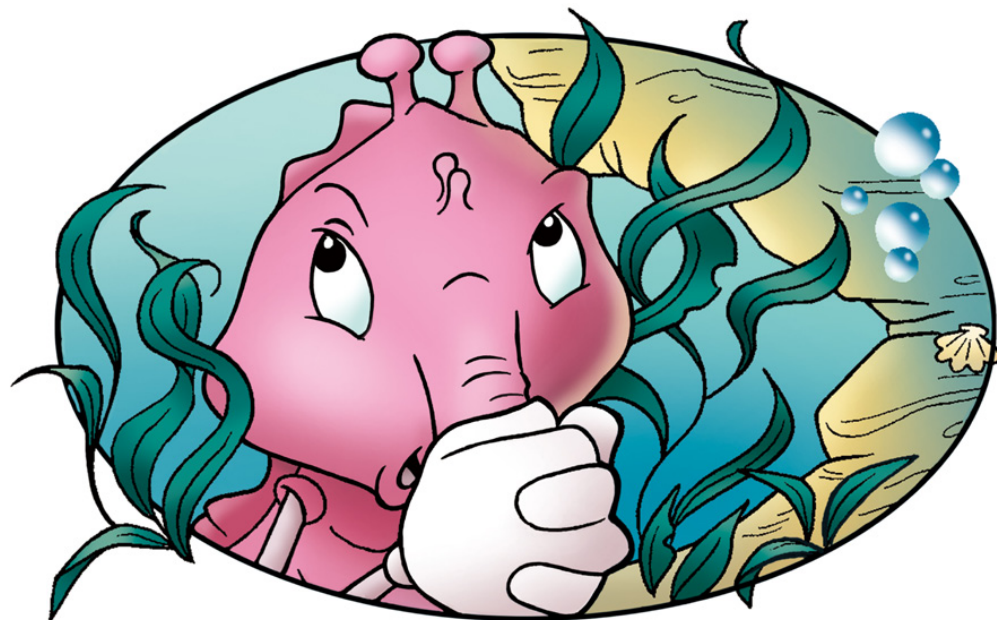
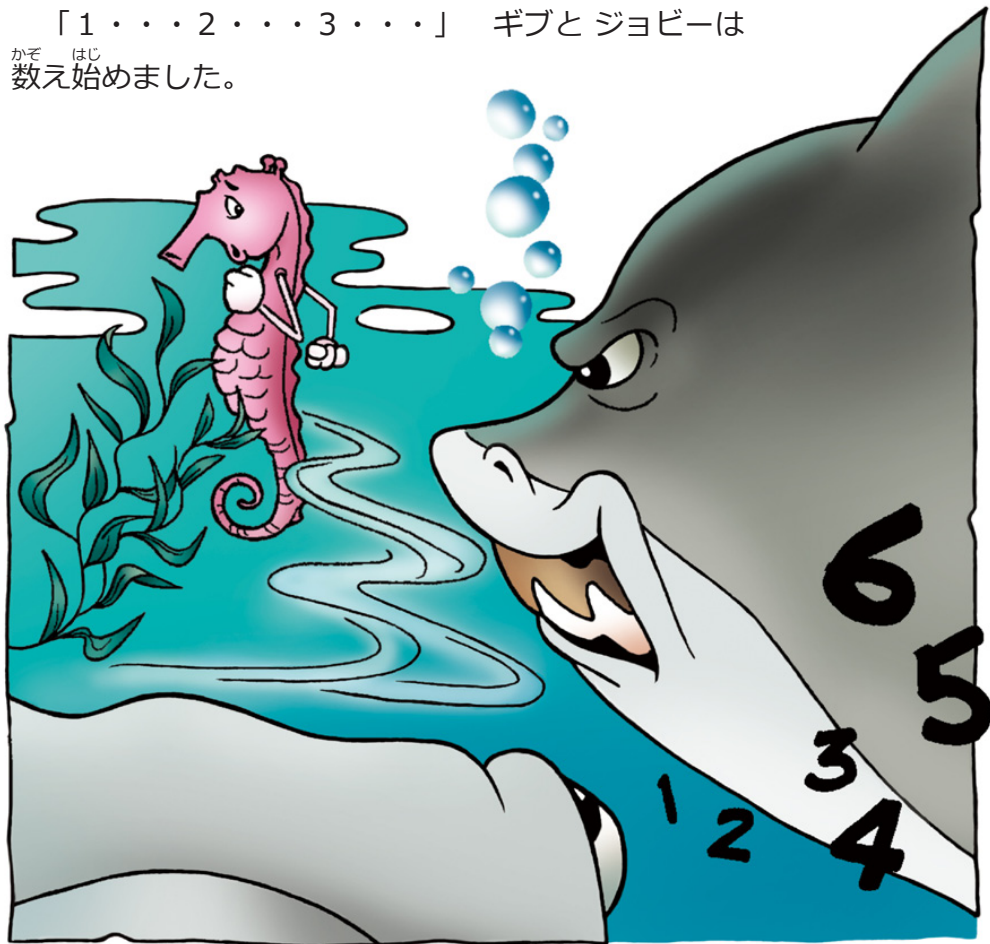
あわれな シャロは、こわくて ブルブル ふるえています。

「お願いします。ぼくを^た食べないでください。」 シャロは、か^{ねが}細い^{ぼそ}声で^{こえ}言いました。

「そうだ！ タツノオトシゴと^{かくれんぼ}をしよう。おれたちが^{かぞ}20数える^{あいだ}間に、タツノオトシゴが^{かくれる}んだ。それを、おれたちがさがすんだよ。」と、ジョビーが^い言いました。

「かくれんぼか・・・^{たの}楽しそうじゃ^{ない}か！ タツノオトシゴよ、^わ分かったか？ ^{ぜんそくりよく}全速力で^{およ}泳ぐんだな。」

「1・・・2・・・3・・・」 ギブとジョビーは^{かぞ}数え^{はじ}始めました。



シャロは、サメに^お追いつかれる^{まえ}前に^{かくれ}ようと、むがむちゅうで、そばのサンゴに^む向かって^{およ}泳ぎました。

「19・・・20！ さあ、行くぞ。」 ギブとジョビーが^{どうじ}同時に^い言うと、シャロを^{はじ}さがし始めました。

シャロはちょうどその^{とき}時、サンゴに^つたどり着きました。そして、サメに^み見つからないように、小さな^{ちい}すきまを^み見つけて、その^{なか}中に^{はい}入りました。

シャロは^{いの}祈りました。「神様、お父さんと^{かあ}お母さんの^い言いつけを^{まも}守らずに^きここに^{ほんとう}来て、本当に^{ごめん}なさい。どうぞ、ぼくを^{たす}助けてください。サメに^{つかまり}ませんように。」

ジョビーとギブは、シャロを見つめようと、サンゴの周りをぐるぐる泳ぎ回りました。「タツノオトシゴちゃん、どこにいるんだい？」 2ひきのサメが声をかけます。

シャロは、じっと静かにしていました。

長いこと、そこらじゅうをさがしていましたが、2ひきのサメはシャロを見つけることができませんでした。

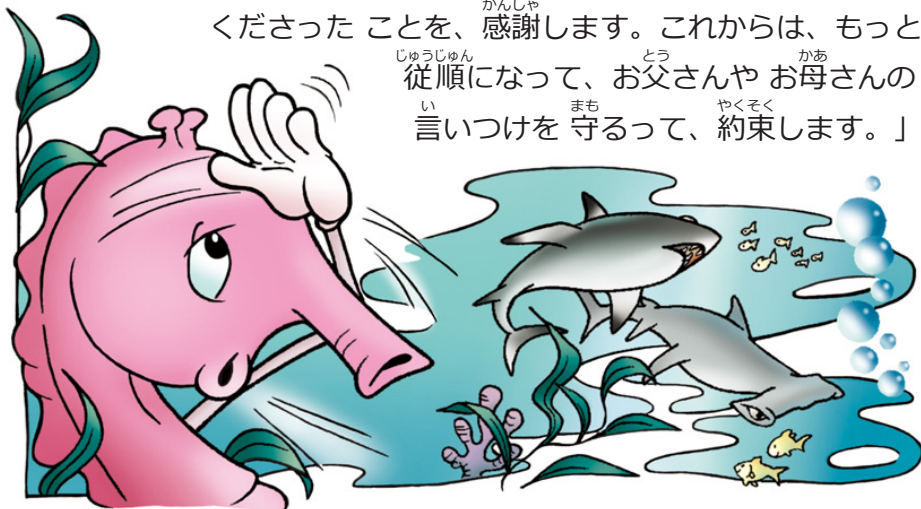
「だから、言っただろ。お前が選ぶ遊びは、ろくなことはないんだよ。楽しくもないアホな遊びを選びやがって。」ギブはおこって言いました。

「楽しかったじゃないか！ お前さんがおこっているのは、タツノオトシゴに逃げられたからだろ。」 ジョビーもどなりました。

「そうさ。だから、もうこれ以上、おれをおこらすなよ。」

2ひきのサメは言い合いをしながら、泳ぎ去って行きました。

シャロは、ほっとため息をつきました。「神様、ぼくを守ってくださったことを、感謝します。これからは、もっと従順になって、お父さんやお母さんの言いつけを守るって、約束します。」



シャロは、周りに気を付けながら、家に帰りました。（みんなに話すいい話ができたよ。言われたことにはちゃんと従うっていう教訓を学んだからね。）と、シャロは思いました。



「シャロ、かわいそうにね！ こわかったね！ サメに見つからなくて、よかったよ。」と、トリスタン。

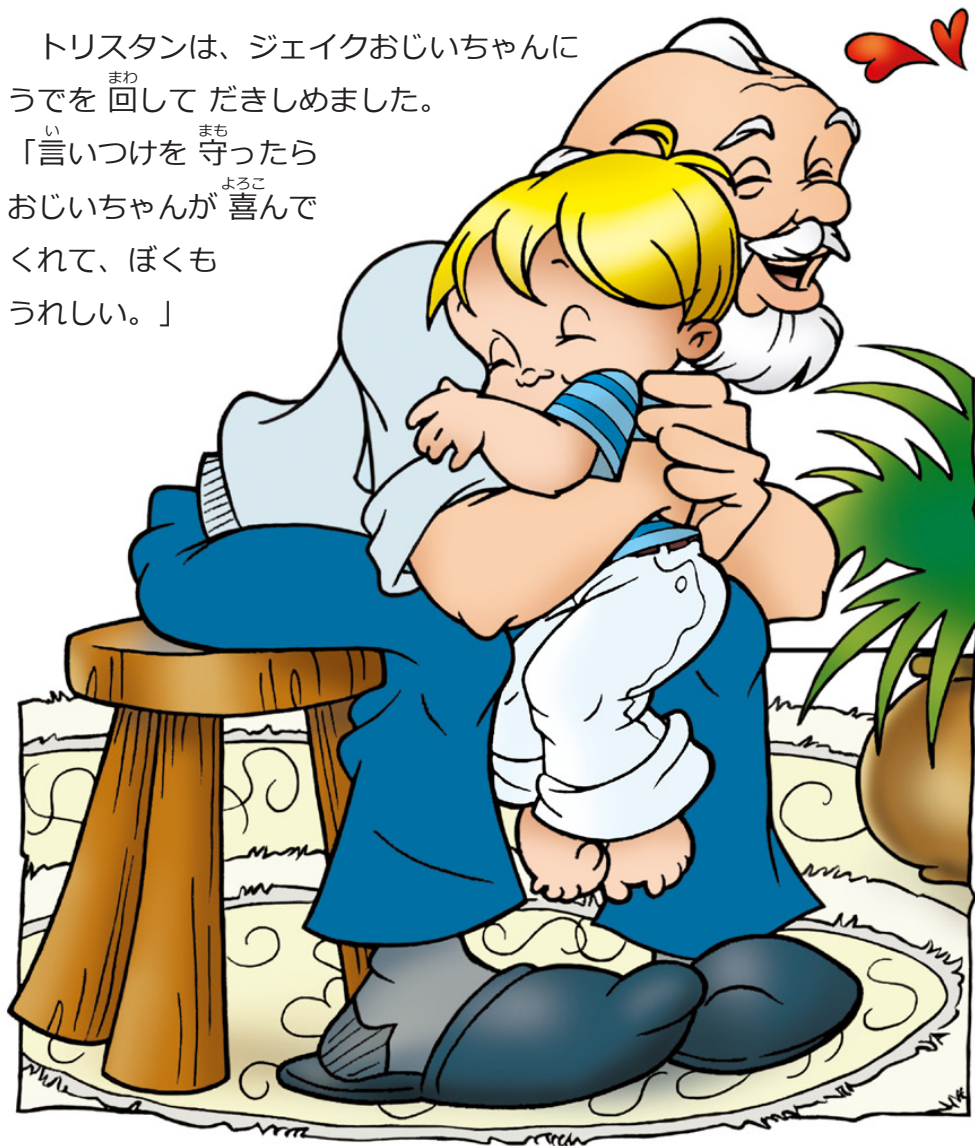
「そうだね。だけど、もしシャロが最初から親の言いつけを守っていれば、危険にさらされることはなかったんだよ。」と、ジェイクおじいちゃんが言いました。

「自分がしたくないことや、理解できないことでも、もっと従わなくちゃいけないって、わかったよ。従えば、後でよかったって思えるんだね。」と、トリスタン。

「それに、トラブルに あわずに すむだろうよ。」と、
ジェイクおじいちゃん。「ところで、ずいぶん ^{へや} 部屋が ^{かたづ} 片付いて
きれいになったじゃ ないか。言った通り^{いとお}に してくれて、
ありがとうよ。」

トリスタンは、ジェイクおじいちゃんに
うでを ^{まわ} 回して だきしめました。

「言いつけを ^{まも} 守ったら
おじいちゃんが ^{よろこ} 喜んで
くれて、ぼくも
うれしい。」



言いつけを
^{まも} 守るのは ^{たいへん} 大変な
ときもあるけど、
言われた ことに
^{したが} ちゃんと 従うなら、
^{あと} 後で、よかったと
^{おも} 思えるよ。

きょうくん
教訓：